

群 教 セ	G06 - 02
	令4.281集
	体育一小

運動に親しみの気持ちを持ち、 自ら運動に取り組む児童の育成

——環境を工夫し、主運動につながる多様な
ゲームの経験を通して——

特別研修員 阿部 将大

I 研究テーマ設定の理由

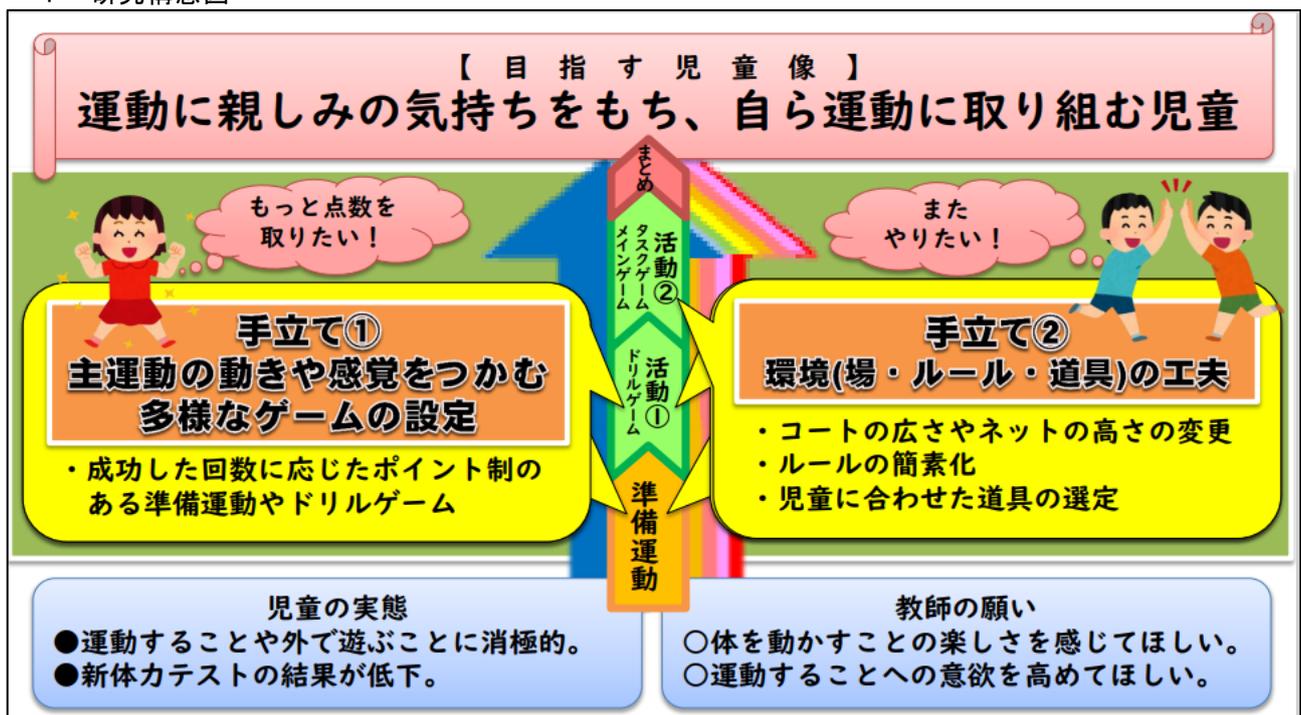
小学校学習指導要領解説体育編（平成 29 年 7 月）では、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること、子供の体力について、低下傾向には歯止めが掛かっているものの、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると、依然として低い状況が見られることが指摘されている。また、全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図ること、その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮することが示されている。

新型コロナウイルス感染症拡大のため、研究協力校（以下、協力校）では取り組むことのできなかつた単元がいくつかあり、運動する機会が減少している。それに伴い運動することに消極的な児童も増えている。新体力テストの結果を見ても体力低下が顕著に表れている。さらに、協力校は昨年度まで大規模校であったため、休み時間に外で遊ぶ場所が制限されていた。そのため、二校に分離した今年度も外で遊ぶ児童の割合が 6 割ほどしかいないという現状がある。

そこで、児童が体を動かすことの楽しさを感じ、運動することへの意欲を高めることができるように、体育授業で行う主運動につながる多様なゲームの経験ができる活動を取り入れ、児童が運動に親しみの気持ちを持ち、自ら運動に取り組むことができるようにすることを目指して、上記のとおり研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

児童が運動に親しみの気持ちを持ち、自ら運動に取り組むことができるように、次の二つの手立てを講じて実践した。

手立て1 主運動の動きや感覚をつかむ多様なゲームの設定
手立て2 環境（場・ルール・道具）の工夫

手立て1は、準備運動やドリルゲームの中で、パスやシュートなどの成功回数やパスやドリブルなどの継続回数をポイント制にしたゲームを取り入れる。そうすることで、運動に苦手意識のある児童もポイントが取れた喜びを感じられるとともに、児童一人一人が数値的な目標をもって活動に取り組むことができるようになる。また、各単位時間後半で行うタスクゲームやメインゲームの運動につなげていくために、個人やペア、チームなど多様な形態での動きを取り入れたゲームを設定することで、運動の楽しさやできたときの達成感を味わいながら技能を高めることができ、児童の意欲も持続することができるようになる。

手立て2は、どの児童も主運動の楽しさを感じながら活動することができるように場やルール、道具を工夫する。場やルールの工夫では、学年や児童の実態に合わせてコートやネットの高さを変更したり、主運動の本来のルールを簡素化したりする。運動に苦手意識のある児童も得点できる機会を増やすことができたり、児童一人一人の運動量を増やすことができたりするようになった。また、道具の工夫では、硬さや大きさなどが異なるボールやラケットを数種類準備し、活動に応じて自分に合った道具を自由に選択できるようにする。道具を代えたことでより得点が取れるようになったり、自己の課題や記録の伸びに結び付いたりすることができれば、児童は苦手意識が薄れて運動に対して前向きに取り組むことにつながると考える。

このように、二つの手立てを通して児童が運動に親しみの気持ちを持ち、自ら運動に取り組むことができるであろうと考える。

III 研究のまとめ

1 成果

- 準備運動やドリルゲームでは、できるだけ多くポイントを取れるように、楽しみながら主体的に活動する児童の様子が見られた。毎時間回数（ポイント）を記録させていたので、「前回より記録が伸びた」などという声が聞かれた。ポイントを得ようと試行錯誤することで、主運動を行う上で必要な運動感覚を味わい、児童が技能の向上を実感することにつながった。
- 使用できる道具を数種類準備したことで、ゲームに応じて使いやすい道具を選択している様子が見られた。また、タスクゲームやメインゲームの中でルールを簡素化したことで、得点を取りやすくなったりプレーが続くようになったりした。これらは、運動に苦手意識のある児童も安心感をもって活動することにつながった。
- 実践授業前の6月に「ボール運動は好きですか？」というアンケートを取ったところ、30人中20人が肯定的回答（とても好き・好き）をしていた。ボールを使った実践授業①後に「とても楽しかった・楽しかった」と回答した児童が26人、実践授業②後には29人と肯定的回答をする児童が増加する結果となり、運動に対する親しみの気持ちをもつようになってきていると言える。これは安心感をもって活動し、技能の向上を児童が実感したことが要因と考える。

2 課題

- 単元の後半にかけて、準備運動やドリルゲームの中でより多くのポイントを取るために主運動の目的からずれた動きをする児童が出てきた。活動の目的をしっかりと伝え、身に付けてほしい技能に難易度を付けて加点するなど、主運動につながる動きが継続的に経験できる活動を工夫する必要がある。

実践例

1 単元名 ネット型ゲーム「テニピン」（第3学年・2学期）

2 本単元について

本単元で扱う「テニピン」は、テニスを基にして簡素化されたネット型ボール運動で、ラケットの代わりに、児童一人一人が自作した段ボール製のラケットでボールを打ち合う運動である。また、素材や大きさの異なる様々なボールの中から自分たちで選択し、ネットの低いコートでプレーすることで、どの児童も楽しくラリーを続けることができる。ラリーが続くことで、前後左右動き回ることになり、豊富な運動量を確保することもできると考えられる。単元の導入では、段ボール製のラケットとボールの扱いに慣れ、打ったボールを相手コートに返球する面白さを味わえるようにする。展開では、ラリーを長く続けられるように、ボールを相手コートに安定して返球する技能を身に付け、ラリーにつながるようなゲームを取り入れる。終末では、チームで作戦を考える時間を設けて話し合いながら改善点を共有し、試合で活用できるようにする。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 基本的なボール操作とボールを操作できる位置に体を移動する動きを身に付け、簡素化されたゲームを行うことができるようにする。 (知識及び技能) (2) 空間や自分の動き・相手の動きをふまえた作戦を立てるとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。 (思考力、判断力、表現力等) (3) 運動に進んで取り組み、規則を守って誰とでも仲よく運動したり、勝敗を受け入れたら、友達の考えを認めたり、場や道具の安全に気を付けたりする。 (学びに向かう力、人間性等)	
評価 規 準	(1)知識・技能 ① サーブをして自陣のコートからボールを打ち入れたり飛んでくるボールを相手コートに返球したりして、ラリーを続けることができる。 ② 基本的なボール操作とボールを操作できる位置に体を移動させる動きによって、簡素化されたゲームをすることができる。 (2)思考・判断・表現 ① 得点につながりやすい返球の仕方（位置）を見付け、チームに応じた作戦を立てている。 ② 友達のよい動きを見付けたり、考えたりしたことを友達やチームに伝えている。 (3)主体的に学習に取り組む態度 ① 簡素化されたゲームの面白さを感じながら、進んで取り組もうとしている。 ② 規則を守り、勝敗を受け入れ、友達と仲よく運動をしようとしたら、友達の考えを認めたりしている。 ③ 道具の準備や片付けを友達と一緒にしようとしている。	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	・実際に試しながらマイラケットを作る。
	第2時	・ボールの打ち方やコート、ルールの確認をし、試しのゲームをする。
追求する	第3時	・サーブゲームやペアラリーゲーム（ネットなし）を行い、ラケットでボールを打つ感覚をつかむことができるようにする。
	第4時	・壁当てゲームやラリーアンドキャッチゲームを行い、ボールを操作できる位置に体を移動させる動きを身に付け、ラリーを長く続けられるようにする。
	第5時	
	第6時	・狙い打ちゲームや得点を取るための作戦会議を行い、狙ったところにボールを打つことができるようにする。
第7時		
まとめる	第8時	・テニピン大会（リーグ戦）を行い、学習の成果を発揮する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全8時間計画の第5時に当たる。本単元では、自作したマイラケットでボールを打つ運動に親しみ、「もっとラリーが続けられるようにしたい」、「もっと回数を増やしたい」という主体的な気持ちを持ちながら活動に取り組むことができるようにしていく。また、どの児童もできるだけ長くラリーを続けることができた喜びを味わえるよう、ボールを打つことにつながる運動としてポイント制のある多様なゲームを取り入れることを重視した。そのために、「つかむ」場面で好きな絵や模様を描いたラケットを作成したり、3時間目までにボールを打つことに慣れるゲームに取り組んだりしていった。そこで本時では、次のような手立てを具体化した。

手立て1 テニピンのボールを捉える動きや狙った場所に打つ感覚をつかむ多様なゲームの設定

- ・打った回数に対応したポイント制のある準備運動やドリルゲーム

手立て2 環境（場・ルール・道具）の工夫

- ・ネットの高さを低く設置
- ・ツバウンドも可
- ・児童に合わせた道具の選定（ボールの選択、マイラケットの作成）

4 授業の実際

本時では、ポイント制のあるゲームを通して、飛んできたボールの方向に移動して相手コートにボールを返球することで、できるだけ長くラリーを続けることができることをねらいとした。

(1) 主運動の動きや感覚をつかむ多様なゲームの設定

準備運動として、床に向かって打つ「ボールつきゲーム」とバウンドしたボールを上に向かって打つ「ワンバウンド打ちゲーム」を行った（図1）。フォアハンドでボールを打つ動きや感覚だけでなく、バックハンドで打つ動きや感覚もつかませるために手の甲でも打てるようにゲームを構成した。ドリルゲームとして、二人もしくは三人が入れ替わりながら壁に向かってボールを打つ「壁当てゲーム」と投げ入れられたボールを相手コートに打ち返す「ラリーアンドキャッチゲーム」を実施した（図2、3）。ラリーを長く続けられることを目的とした。「壁当てゲーム」は1分間で何回打つことができたか数えながら取り組み、その回数をポイントにした。また、「ラリーアンドキャッチゲーム」は打ち返されたボールを相手コートにいる児童がキャッチもしくはボールに触れることができればポイント獲得とした。児童は、「前回より記録がのびたぞ」と喜んだり、「チームで何回できるかな?」「たくさんラリーを続けたいな」などポイントを得ようと試行錯誤したりして、結果的に「テニピン」で必要な運動感覚を味わっていた。



図1 準備運動
「ワンバウンド打ちゲーム」



図2 ドリルゲーム
「壁当てゲーム」



図3 ドリルゲーム
「ラリーアンドキャッチゲーム」

(2) 環境（場・ルール・道具）の工夫

手立て2は、タスクゲームやメインゲームで二人または四人でできるだけ長くラリーを続けられるように場やルール、道具を工夫した。場やルールの工夫では、ネットの高さを低く設置し、ツバウンドしてから打ち返すことを可とした（図4）。そうすることでラリーが頻繁に途切れることを防いだり、余裕をもってボールの落下地点に移動して打ち返したりすることができる考えた。道具の工夫では、児童の実態に合わせて大きいボールと小さいボールを自由に選択できるよう

にした（図5）。運動に苦手意識のある児童やボールがなかなか前に飛ばない児童は面で捉えやすく、反発力もあるため大きいボールを選択し、ラケットでボールを捉えることに慣れてきた児童は小さいボールを選択している様子が見られた。また、好きな絵や模様を描き、手の大きさに合わせて作成したマイラケットを使用することで、愛着をもって活動ができるようにした（図6）。



図4 ミニコーンとトラパーで
ネットを作成



図5 使用した2種類のボール



図6 手作りしたマイラケット

5 考察

手立て1の主運動の動きや感覚をつかむ多様なゲームの設定では、準備運動で「ボールつきゲーム」や「ワンバウンド打ちゲーム」を毎時間取り組んだため、少しずつ回数が伸びていっている様子が見られた。運動に苦手意識のある児童も単元が進むにつれて安定して続けることができていたので、ラケットの扱いやボールを捉える感覚が身に付いたと考えられる。また、ドリルゲームでできるだけ長くラリーを続けるゲームや狙ったところに打つゲームなど、主運動につながる様々なゲームに取り組んだ。ゲームを通して「〇〇点取れた」「狙ったところに当たった」などという声が聞こえ、楽しく活動している様子が見られた。これらのポイント制のあるゲームは、今回扱ったテニピンの単元だけでなく、他の運動領域においても有効であると思われる。

手立て2の環境（場・ルール・道具）の工夫では、ネットを低くし、ツーバウンドまで可にしたことで、タスクゲームやメインゲームの中でラリーが続いているペアが多く見られた。今回は3年生で扱ったため、単元最後までツーバウンドのルールを続けたが、単元の前半まではツーバウンドまでにしてラリーをすることに慣れてきたら単元の後半にはワンバウンドまでにするなど、学年に応じて柔軟にルールを変更していくことが有効であると考えられる。また、大きいボールと小さいボールの2種類を準備したことで、自分に合った打ちやすいボールを選択でき、小さいボールだとうまくボールを捉えることができなかつた児童もボールを前に打ち返すことができていた。他の運動領域においても運動に苦手意識のある児童に合わせて道具を複数準備しておくことが有効であると思われる。今回手作りして使用したラケットは、段ボール2枚の両端をゼムクリップで留めて作成したが、単元が進むにつれて汗で段ボールがふやけてしまう児童が数名見られた。そのため、活動中にラケットが手から外れたりゼムクリップが取れたりすることもあったため、素材や留め具の選定など耐久性を高められるような改善していく必要がある。

さらに、ボール運動に対する意識調査のアンケートでは、授業実践①前（6月）に比べて本単元である授業実践②後（11月）には肯定的な回答をした児童数が増えた（表1）。また、「授業以外でテニピンのようなボール運動をしましたか？」の質問には、7人が「家でしてみた」、11人が「これからしてみたい」と回答した。これは、授業以外でも運動に取り組もうとする気持ちの表れであり、本単元での手立てが有効に働いた成果と考えられる。

表1 ボール運動に対する意識調査の結果

ボール運動について「とても好き・好き」と回答した児童の人数	授業実践①前（6月）	授業実践①後（6月）	授業実践②後（11月）
		20人	26人

（アンケート実施人数：30人）